

平成 29 年 7 月 23 日 (日)

城端線開通 120 年記念連続講座

『城端線は何を変えたのか』

第 2 回「明治人は鉄路に憧れた」

人・モノの移動と舟の道

廣瀬 直樹 (氷見市立博物館)

はじめに

○海と川の道＝水運・舟運

1. かつては船が物流の要だった

○江戸時代の日本海交易⇒北前船

- ・江戸・大坂への年貢米の廻米
- ・北前船主の活躍 「バイ船」
 - 蝦夷地から : 魚肥 (鯨)・昆布など
 - 大坂から : 綿・塩・古手木綿など
 - 蝦夷地・大坂へ: 米・ワラ製品など
- ・岩瀬・伏木・放生津・氷見・水橋

○河川舟運

- ・内陸輸送⇒陸運＋水運
 - 水運: 河川・水路 ⇒ 川舟の使用

○渡し舟と船橋

- ・常設船橋と仮船橋
 - 日本一の常設船橋: 神通川船橋
 - 参勤交代の仮船橋

2. 内水面の舟 ～川舟・潟舟～

- ・河川を利用した舟運 上流⇔下流
- ・渡し舟・船橋
- ・漁業⇒川漁・潟漁
- ・農作業⇒肥料の運搬、苗・稲の運搬

3. 庄川・小矢部川水系の舟運

- 富山県西部の物流の中心⇔伏木港
- 小矢部川・庄川の舟運、伏木を介して海へ
 - ・小矢部川と庄川は河口部で合流（射水川） ※大正元年（1912）までに分離工事
 - ・伏木港は河口部に形成
 - ・小矢部川・庄川および両河川の支流、水路等を行き交う川舟⇒積み荷は伏木へ
- 中越鉄道の開通＝河川舟運の近代化

4. 小矢部川舟運と町立て

- 阿曾三右衛門⇒福野・福光・津沢の町立てを行った郷士
 - ・福野の町立て：慶安2年（1649）
 - ・福光の町立て：慶安4年（1651）
 - ・津沢の町立て：万治3年（1660）小矢部川中流右岸に藩蔵を建設。
砺波郡各地からの年貢米は小矢部川を下って吉久御蔵へ、伏木浦から大阪へ。

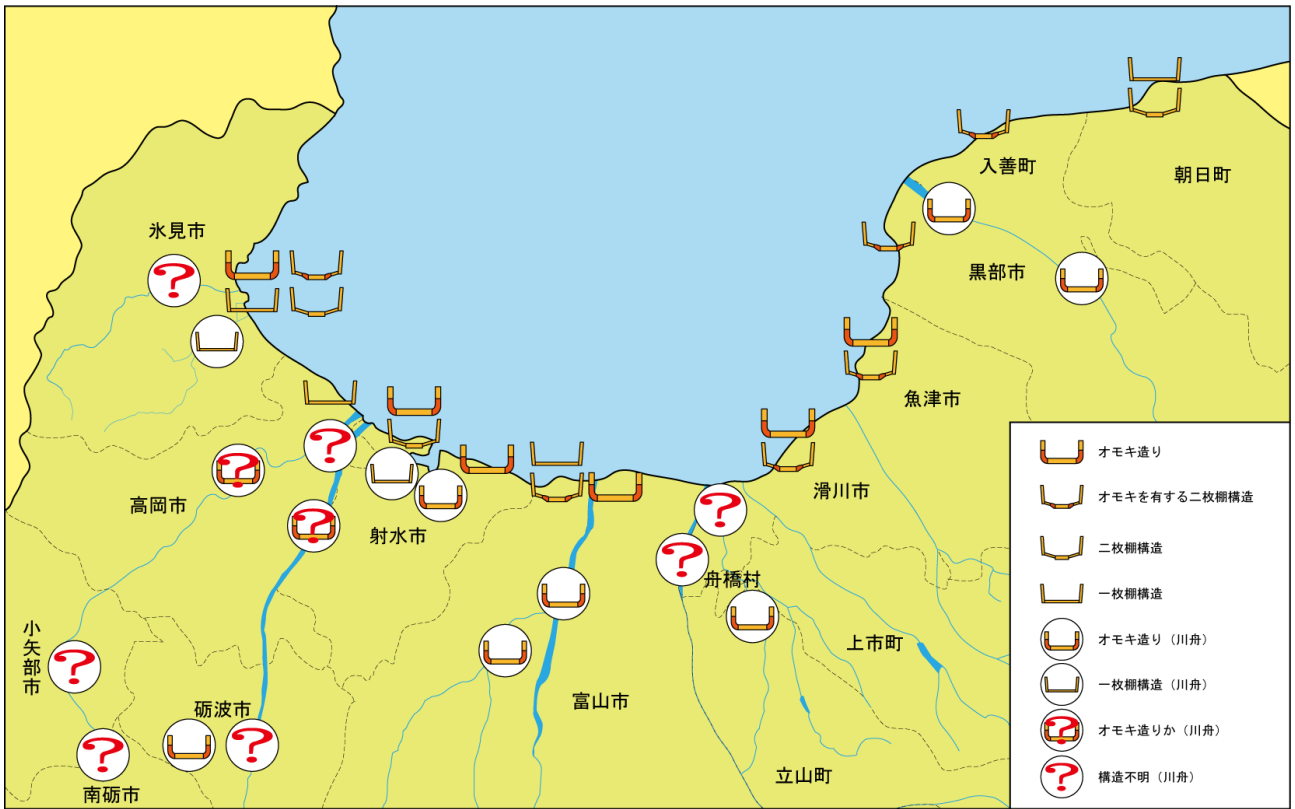
5. 日本海交易と船

- 北前船 ≠ 弁才船・千石船
 - ・弁才船：船の船種名、200～2000石積
 - ・千石船：弁才船の中でも千石クラスの大型船
 - ・北前船：大坂～瀬戸内海で日本海方面から来る廻船を指す俗称
- 北国船・羽賀瀬船
 - ・江戸時代前期の日本海交易を担った船
 - ・操船性能・経済性が劣り 18世紀以降衰退

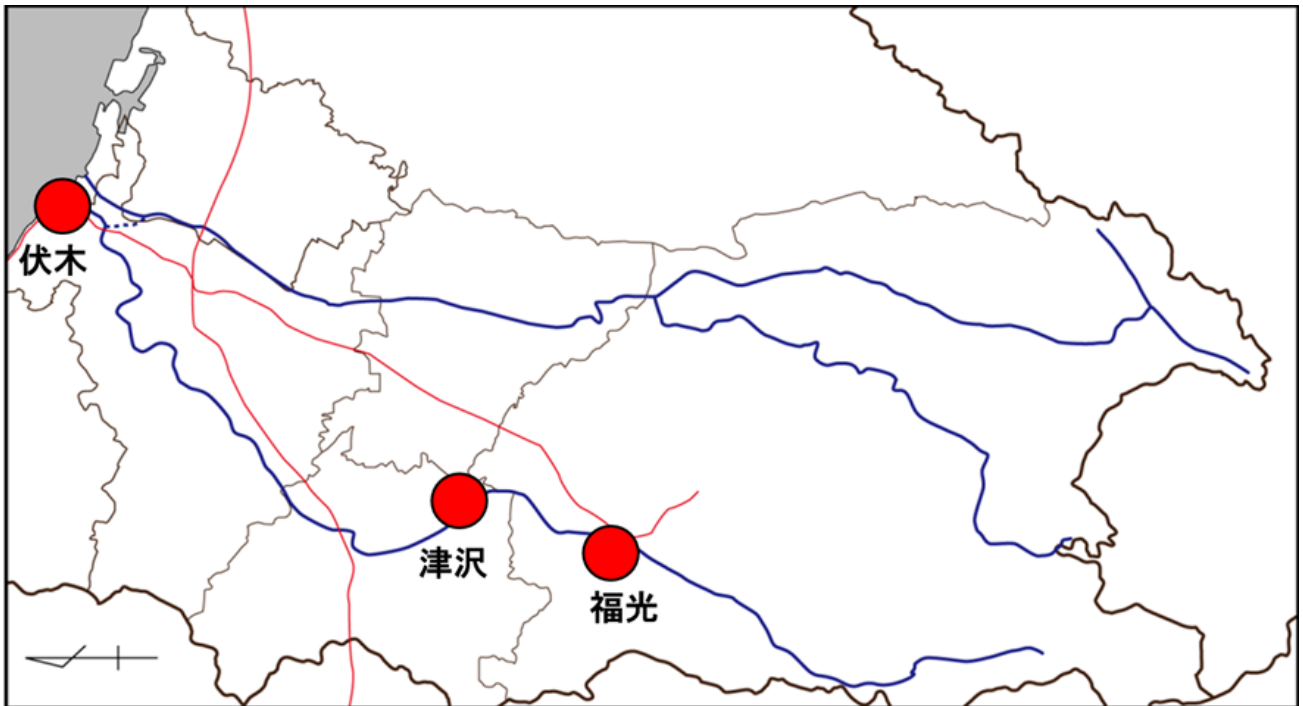
6. 現存資料に見る富山県の川舟

- 板合わせとオモキ造り
 - ・放生津瀉、十二町瀉の板合わせの川舟
 - ・県内各地に分布するオモキ造りの川舟

おわりに ～川舟の終焉期～



富山県の和船分布図



庄川・小矢部川水系と城端線



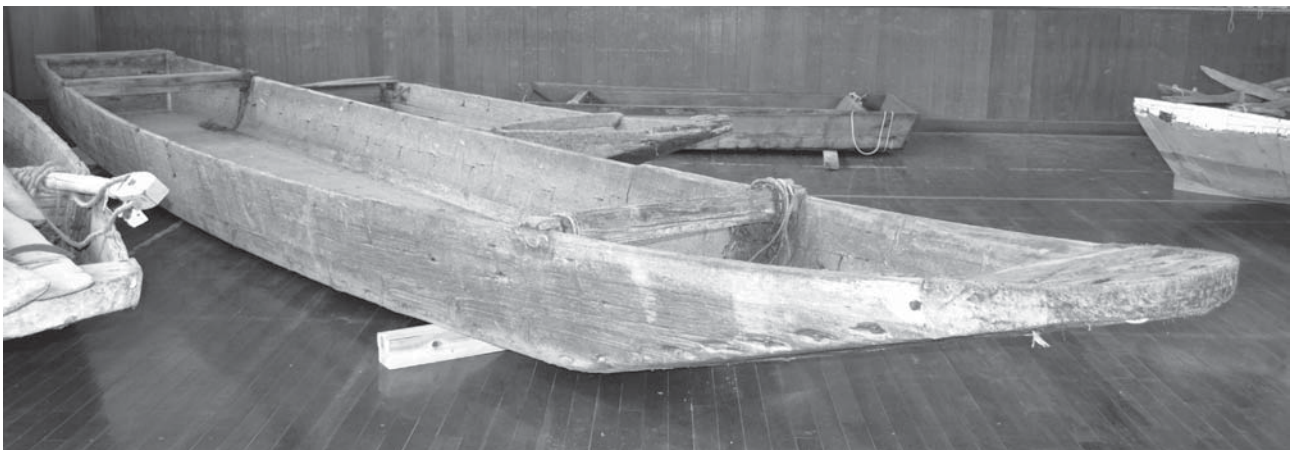
ササブネ（富山市婦中町笹倉）浅野興太郎氏旧蔵 全長7.75m、全幅1.04m

昭和50年頃、富山市布瀬町の田島良作氏によって建造されたオモキ造りの川舟。神通川流域で用いられた大小のササブネのうち、川漁用のコブネである。操船はフナザオのほか、コイスキと呼ばれる櫂が用いられた。



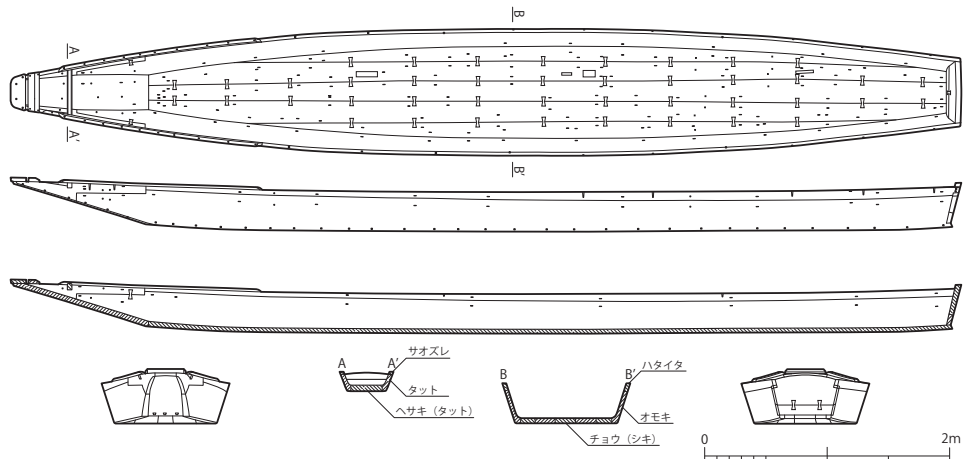
イクリ（放生津潟）射水平野土地改良会館蔵 全長7.6m、全幅1.52m

昭和38年、新湊（現、射水市）の中瀬造船所で建造されたイクリ。一枚棚構造（平底）の川舟で、放生津潟周辺の水郷地帯では肥料や稲を運搬するのに使用された。また水田の中では小型のタズルやラチカンコが用いられた。棹や櫓で操船した。



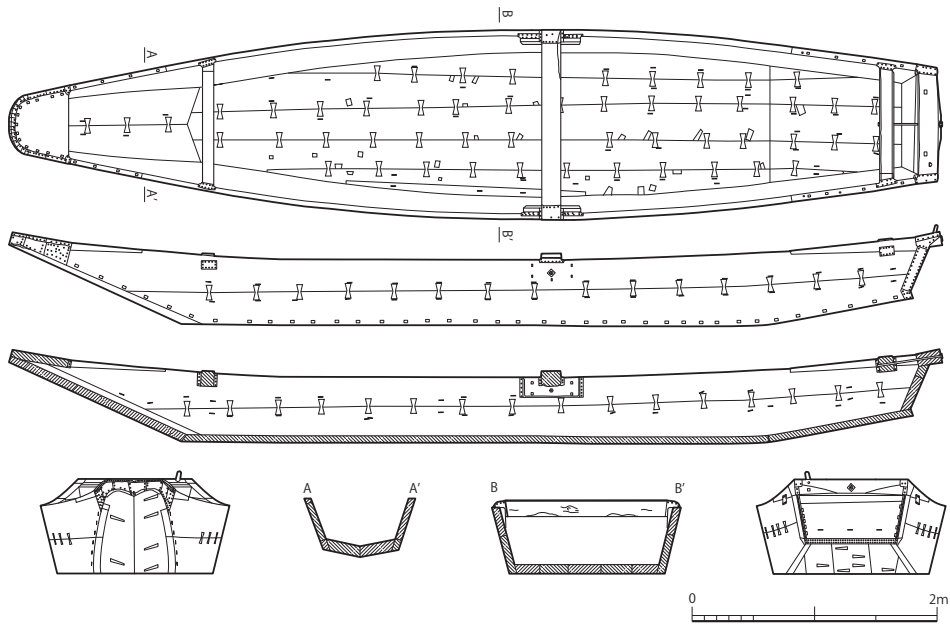
タズル（オオフネ）（十二町潟）全長8.64m、全幅1.44m

氷見市上伊勢の村田造船で建造されたタズル。ズツともいふ大型の舟をオオフネ、小型の舟をテンマとも称した。オオフネ、テンマとも一枚棚構造（平底）で、操船には棹が用いられた。十二町潟周辺では田植えから稲刈りまでなくてはならない存在だった。



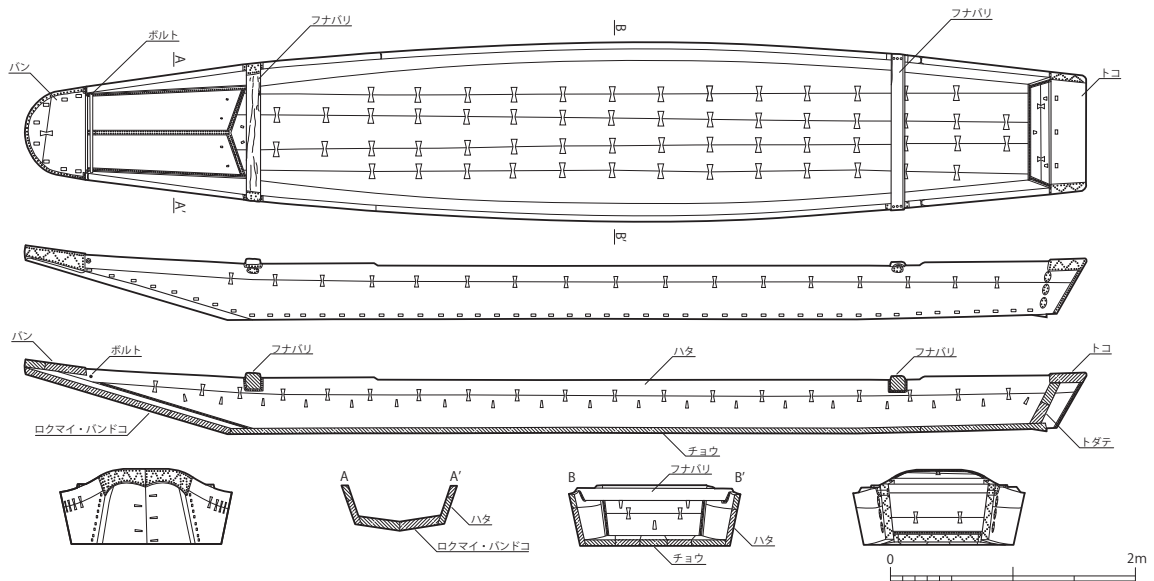
ササブネ

富山市婦中町笹倉 浅野興太郎氏旧蔵 昭和50年頃建造 造船：田島良作



イクリ

放生津潟 射水平野土地改良会館蔵 昭和38年建造 造船：中瀬造船所



タズル (オオフネ)

十二町潟 造船：村田造船